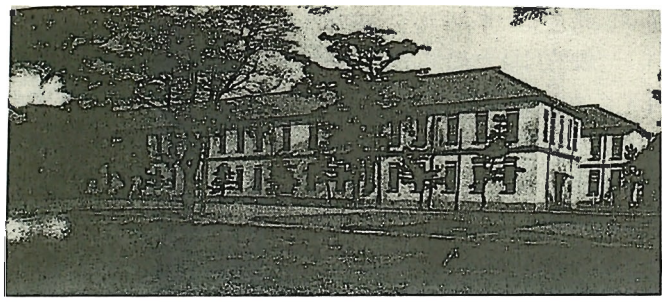
かけとなりイサ子の長女はピアノの道に進み国立音楽大学を出、今でもピアノを教えている。宗教には深入りしなかった。とにかく祖父は決して威張ることをせず、謙虚であった。

## 熊幼のドイツ語教育

明治の陸軍は、日清戦争直後に陸軍幼年学校を大幅に拡充して、一期合計三百人の地方幼年学校を全国六都市に開設した。九州では熊本城二の丸に置かれた。主たる目的は堅実な徳操と、軍人精神を純粋培養するにあった。さて、この六地方幼年学校において特記すべきは、その修得外国語である。当時独協中学など特殊な二、三の中学校を除き、全国の中学校及び高等小学校での必修外国語は英語であった。だが、幼年学校では独、仏、露の三カ国語が課せられ、その内一つを履修した。ロシア語があったのは東京の陸幼で、他の五校では独語、仏語が課せられた。仮想敵国と目されたロシアのロシア語を一校に止め、他の五校に独語、仏語を課したのは軍事先進国たる独仏両国に学ぶためであった。

次に、手元の2冊の『熊本陸軍地方幼年学校一覧』（明治35年及び大正2年）によって同校初期のドイツ語教育を概観してみたい。先ず、1897年（明治30）6月開校の同校の目的については「本校ハ陸軍将校ニ出身志願ノ者ヲ選抜シ生徒トナシ軍事上ノ必要ヲ顧慮シテ普通学科ヲ教授シ軍人精神ヲ涵養シ陸軍中央幼年学校生徒トナルヘキ者ヲ養成スル所トス」とある。士官候補生の養成を目的とする中央幼年学校を本科とすれば、地方幼年学校は予科である。生徒の教育は「教授」と「訓育」から成り、前者は文官教官が、後者は陸軍将校がそれぞれ担当した。入学定員50名。修業期間は3年。9月開始の前・後期制を採った。入学時の年齢は13歳以上15歳以下と定められた。



熊本陸軍幼年学校（明治35年）

ドイツ語の授業は（フランス語も同様だが）2年次までは毎週6時間、3年次は7時間実施された。3年間では実に合計750時間に達した。次に多いのが代数の276時間であるから、幼年学校では語学がいかに重視されたかが分かる。

次に課程と教科書を見てみよう。

一年の前期では最初中央幼年学校編纂の五十音帖により発音、綴字を教え、その後ウォーマン（James H. Worman）のFirst German Bookを用いて読方、訳解、文法、会話、書取等を授け、更にドイツ文字とラテン文字の習字を課した。後期にはFirst German Bookを引き続き用い、それが終わるとその第二を使用し、2年次の前期も同様であった。後期からは大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎編の独文読本第二によって読方、訳解等を教え、別にシェーフェル独逸文典によって文法と作文を教えたが、3年次でも同じ教科書を用いた。

明治期には幼年学校に限らず一般に習字に熱心だった。そのため見事な筆跡の独文を書く人

が少なくなかった。米国で出版されたウォーマンのジャーマン・ブックは副題に「自然的またはペスタロッチ的方法による」とあるように、自然や動植物を扱った絵入りの読章が収められていて、幼年学校生が学ぶにふさわしい健全な読本だった。当時ドイツ語界の三太郎として知られた大村・山口・谷口編の独文読本も道徳的価値を有する事績を扱った詩文を収めていて、生徒はこれによってドイツ語を学ぶと同時に徳性を涵養することができた。シェーフェル文典は明治10年代から20年代にかけて諸学校で広く用いられたが、30年頃は英文の教科書が主流になっていた。だが陸幼生は英語を未習だったので、なおシェーフェル文典を用いたのだろう。

1899年（明治32）4月25日発行『独逸語学雑誌』は熊幼生の米村及び是永両君の独作文を掲載し「同校は設立以来日尚浅きにも拘らず生徒の独乙語に於る進歩の著しきを見るに足るべし」と記している。紙幅の都合でそれをここに引用できないのは残念である。素より誤りも少なくないが、熊幼のドイツ語教育が相当成果をあげたのは確かである。なお、熊幼生の多くは卒業後、中央幼年学校において更に2年間ドイツ語を勉強したので、そこの卒業生は一層高度な語学力を備えていたと判断される。

独語担当教官には陸軍教授として川室圭吾、中台重躬（なかだい・しげみ）、助教として松島誠明らがいた。

川室は東大医学部予科出身の独語学者で、熊幼初代の独語教授を務めたが、まもなく中央幼年学校へ転任になった。『学生必携独和教場会話』（明治37）やリーダー Freund in Sommerferien（同42）などの著作もあり、初期陸幼のドイツ語教育において最も功績のあった人だ。中台は最初長崎の第五高等学校医学部の嘱託講師のち助教授としてドイツ語を教えていたが、川室の後任として熊幼に迎えられた。彼にも『独逸作文早わかり』（明治33）という入門書がある。鷗外の日記には彼の名前がしばしば登場するので、二人は交友があったらしい。松島は旧東京外国語学校を経て独逸学協会学校専修科を明治28年に卒業、熊幼の開設と同時に助教として勤務し、大正3年頃までその地位にあった。

これらの教師に導かれながら、純粋で、凛々しい熊幼生たちが熱心にアー、ベー、ツェーを唱えていた姿はいじらしく、また尊い。一般的に陸幼のドイツ語教育は、語学教育としては成功したと言えよう。またそれは我が国ドイツ語教育史上特異な位置を占めている。だが軍事史家も指摘するように、問題も内在していた。初期の陸幼で課した外国語は独、仏、露の三カ国語で、英語と中国語は中学校から士官学校に入った者が専ら修得した。他方、軍事研究のため留学した将校の中では、陸軍大学校卒業時の成績の関係上、幼年学校出身者の方がずっと多かった。そして独仏ソ留学将校は帰国後多く重要な地位に就いたが、米英留学組にはそれが少なかった。このことが結局、陸軍上層部の対米英認識を貧弱なものにした主要な原因となった。

## 第五高等学校龍南会編纂『新撰独文読本』

明治期の独語読本ではヘステルス、ボック、エンゲリンなどのドイツ製のものと英国製のブッフハイム独逸新読本が主流を占め、広く用いられた。だが、明治後期にはそれを潔しとせず日